

# 「学校におけるがん教育のすすめ方」をテーマに 町田市学校保健大会で林和彦・東京女子医大教授が特別講演

2月16日、東京・町田市の町田市医師会館で、第46回町田市学校保健大会が開催され、東京女子医科大の林和彦教授が「学校におけるがん教育のすすめ方」をテーマに特別講演を行い、町田市の学校医、学校歯科医、学校薬剤師、学校長、養護教諭、栄養士など約80人が参加した。



講演する林和彦教授

林教授は、数年前からがんの啓発活動に取り組んできた。新宿駅でイベントを行ったり、テレビドラマの台本の医療監修を行ったりして、がんや緩和ケアに関する啓発活動を行ってきたが、子どもたちに正しい知識をもってもらおうと、がん教育に取り組みはじめ、医師として働きながら、今春教員免許を取得した。

初めに、現在の日本のがんの状況を説明し、がんはいまやありふれた病気で、早期発見早期治療すれば約6割が治るということを説明した。そして、子どもたちの授業の感想を紹介しながら「小学生に対しては、『がんは治らない怖い病気』という恐怖感を取り除くような話を始めていくのもいい。高校生くらいなら、キャリア教育とも絡め

られる」と、発達段階に応じた授業内容についても説明した。

また、がんの授業をきっかけに子どもたちが家族とがんや健康管理について話すようになることは、公衆衛生の観点においても大切なことだと述べた。最後に「子どもたちには、がんをむやみに怖がるのではなく、正しい知識を得ることで、人生の困難にどう立ち向かい、克服していくのかを考えられるようになってほしい」と思いを語った。

講演後の質疑応答では、中学校の養護教諭から、がん教育を行う際の児童・生徒へ具体的にはどんな配慮をすればよいのかという質問があり、林教授は「過剰な対応は不要だと思う。授

業の前に学校側とよく打ち合わせをしているが、小児がん経験者だけでなく、家族や身内にもがん経験者やがんで亡くなっている人がいる子どもたちもいる。子どもたちの心に土足で入らないようにすることが大事ではないか」と答えた。

町田市の学校医が「がんに関する正しい知識を得て、自分が当事者になったときにあたふたしない、生活習慣に気を付ける、というのががん教育なのではないかと思った」と感想を述べると、林教授は「教員、学校医、医師会が一丸となって取り組んでいきましょう」と応じた。

最後に町田市学校保健会会長の吉川篤町田市立第二中学校校長が「患者や家族、がん教育への熱い思いが伝わりあつという間の90分だった。今、学校現場でも教員や生徒の家族ががんになったり、身内ががんで亡くなったりすることは珍しくない。それぞれの気持ちを考えて委縮し、がん教育に対して消極的になっていたが、こういう時だからこそ一歩踏み込んでがん教育に取り組んでいきたいと思った」と感想を述べた。(岩井靖子)

## 吹田市で教員向けのがん教育研修会 佐瀬・順天堂大教授が講演



講演する佐瀬教授

大阪府吹田市教育委員会と吹田市学校保健会は2月16日、教員や市内の学校医、学校歯科医、学校薬剤師を対

象にした、がんの教育に関する研修講演会を吹田市内の市文化会館で開催した。文部科学省が来年度からがん教育の全国展開の方針を示していることを受け、がん教育の必要性やその進め方を学ぶのが狙い。日本対がん協会と各地でがん教育を実践している佐瀬一洋・順天堂大学大学院教授が「モデル授業から得られたがん教育への感謝と期待～医師として、患者として、子どもを持つ親として」と題して講演。約80人が参加した。

講演会で佐瀬教授は、自分が悪性骨軟部肉腫という希少がんを患った時にがんを不治の病として描くドラマや映

画を見て絶望したものの、治療を受けて、生かされていることへの感謝の気持ちを示し、「時代が変わっても変わらない命の尊さと、正しい知識の大切さを子どもたちにぜひ伝えて欲しい」と呼びかけた。

また、がんの知識を教えようということにこだわらず、「がんのことを知らないからと遠慮することなく、外部講師を活用するなどして、まずはがん教育を実践してほしい」と強調。「それには個別の先生の対応では無理」として、「教育委員会や行政の保健福祉部局、がん拠点病院などの連携が必要」と訴えた。(本多昭彦)